

第 22 回山階芳麿賞記念シンポジウム

ガンが渡る風景を 日本の空にもう一度

～絶滅から復活への道を歩み始めた日本のガンと、
日本雁を保護する会 52 年間の活動～

令和 4 年 9 月 23 日 (金) 13:30 ~ 16:00
東京大学 弥生講堂

主催 公益財団法人 山階鳥類研究所
共催 朝日新聞社 後援 我孫子市

目次

プログラム	2
山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって (公財) 山階鳥類研究所 総裁 秋篠宮文仁	3
第 22 回山階芳麿賞 贈呈理由 山階芳麿賞選考委員長 / (公財) 山階鳥類研究所 シニアフェロー 奥野卓司	4
受賞団体の紹介	5
受賞のことば 日本雁を保護する会 会長 呉地正行	6
講演要旨	
日本へ渡るガン類の歴史の変遷とその保全・復活の取り組み 日本雁を保護する会 会長 呉地正行	7
東アジアのハクガン復元の取り組みとその成果 日本雁を保護する会 佐場野 裕	8
ガン類の渡りを解明する国際共同調査への架け橋 日本雁を保護する会 須川 恒	9
山階芳麿賞とは	10
山階鳥類研究所の紹介	11
ご支援のお願い	12
山階芳麿賞 歴代受賞者	13

プログラム

開会

ごあいさつ (公財) 山階鳥類研究所 所長 小川 博

ごあいさつ 朝日新聞社 CSR 担当執行役員 福島範彰

贈呈理由 山階芳麿賞選考委員長 / (公財) 山階鳥類研究所 シニアフェロー
奥野卓司

■講演■

日本へ渡るガン類の歴史の変遷とその保全・復活の取り組み

日本雁を保護する会 会長 呉地正行

東アジアのハクガン復元の取り組みとその成果

日本雁を保護する会 佐場野 裕

(休 憩)

ガン類の渡りを解明する国際共同調査への架け橋

日本雁を保護する会 須川 恒

■質疑応答■

呉地正行 / 佐場野 裕 / 須川 恒

閉会

司会 (公財) 山階鳥類研究所

広報ディレクター 平岡 考

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって



(公財) 山階鳥類研究所 総裁

秋篠宮文仁

公益財団法人山階鳥類研究所は、30年前の1992年に財団設立50周年を迎えました。その記念の年にあたり、創立者である山階芳麿の名を冠した「山階芳麿賞」を創設し、鳥学ならびに鳥類保護に顕著な功績があった方もしくは団体に贈呈しております。

本年、第22回の山階芳麿賞は、「日本雁を保護する会」にお贈りすることになり、去る7月22日に贈呈式が行われました。受賞された日本雁を保護する会に心からお祝いを申し上げます。

日本雁を保護する会は、約半世紀前の同会創立当時、激減していた日本に渡来するガン類を対象に、保護と調査研究を国際的な繋がりをもって進め、ガン類についての知識を大きく前進させるとともに、保全の上でも大きな成果をあげられました。また同会は、各種の催しや幅広い著述により、ガン類の現状と保護の必要性についての普及啓発活動を行い、さらに各種の国際会議の場においても、東アジアにおける鳥類保護の主体として多にその役割を果たしてこられました。

本日は、日本雁を保護する会への山階芳麿賞贈呈を記念するシンポジウム『ガンが渡る風景を日本の空にもう一度～絶滅から復活への道を歩み始めた日本のガンと、日本雁を保護する会52年間の活動～』を開催いたします。本シンポジウムが、古くから詩歌や絵画の題材として取り上げられ、人々と隣り合わせで生きてきたガン類の復活のために尽力されてきた日本雁を保護する会の活動を振り返るとともに、今後のガン類保全と日本の自然環境保全の課題について考える機会になれば幸いです。

おわりに、日本雁を保護する会の活動が今後ますます発展し、同会ならびにご関係の皆様が一層の活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

第22回山階芳麿賞 贈呈理由



山階芳麿賞選考委員長
(公財) 山階鳥類研究所 シニアフェロー

奥野卓司

日本雁を保護する会は、1970年に、仙台市福田町で越冬するマガンの保護を目的とした「福田町の雁を保護する会」として発足して以来、戦後激減していたガン類の保全と調査研究に貢献してきました。その活動と歩調を合わせて、1970年には日本で5,000羽余りしか確認されなかったガン類は、現在は20万羽を越えるまでに復活しました。

調査研究上の成果として、日本に渡来するガン類の分布と渡りに関する全体像の理解を大きく前進させたことがあります。まず、ヒシクイの2つの亜種、亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイの野外識別法を確立し、それまで明らかではなかった両者の生態の違いと日本での越冬状況を解明しました。また、「ガン類渡来地目録」(1994)で、全国レベルでガン類の渡来地の情報を取りまとめました。さらに日本で越冬する主要なガン類であるヒシクイとマガンについて、首環標識や人工衛星発信器を用いたロシアなどとの共同調査により、日本に渡来する個体群の繁殖地を解明しました。

保全上の成果として、発足後間もない1971年には、激減していたマガンとヒシクイを狩猟鳥から外し、天然記念物に指定するキャンペーンを行い、コクガンも含めた3種の天然記念物指定を実現しました。日本への渡来がほとんどなくなっていた希少ガン類の再導入は、生息域外保全を域内保全に結びつけた重要な業績です。このうち、「シジュウカラガン羽数回復計画」は、仙台市八木山動物公園との協力関係を基盤に、アメリカ合衆国、ロシアとの協力を同会が中心となって進め、その結果、2021年には1万羽近くのシジュウカラガンが日本で越冬するまでに回復しました。ハクガンについても、日露米3カ国が共同で「ハクガン復元計画」を行った結果、2021年には日本への飛来数が2,000羽を越えました。次に、「ふゆみずたんぼ」(冬期湛水水田)の提唱と実践は、越冬ガン類と農業の「共生」を目指し、水鳥の生息地を拡大するとともに、生物多様性の向上に寄与するものです。

同会はまた、会や会員による各種の催しや幅広い著述でガン類の現状と保護の必要性について社会に普及啓発してきました。さらにラムサール条約や生物多様性条約の締約国会議における水田決議の採択のために尽力するなど、東アジアの鳥類保護の主体として国際的にも役割を果たしてきました。

このように、同会は半世紀以上にわたり、日本に渡来するガン類の保護と調査研究を、国際的な広がりをもって進め、日本に渡来するガン類についての知識を大きく前進させるとともに、保全上も大きな成果をあげ、その社会的な影響も大きなものがあります。これらの業績を讃えて、山階芳麿賞選考委員会は、日本雁を保護する会に山階芳麿賞を贈呈することがふさわしいと判断いたしました。

受賞団体の紹介

日本雁を保護する会 (にほんがんをほごするかい)

【設立】

1970年9月「福田町の雁を保護する会」として発足。

(71年1月「雁を保護する会」と改称。97年4月「日本雁を保護する会」と改称)

【役員】

会長：呉地正行 副会長：鈴木道男 事務局長：宮林泰彦

【目的】

古来より日本国民に親しまれ、近年急激に減少したガンを中心とするガンカモ科の鳥類の保護をはかり、同時に調査研究を推進することをもって本会の目的とする（会則第2条）。

【主な著書】

『鳥類生態学入門—観察と研究のしかた』（共著）（山岸哲（編著）・1997・築地書館）◆『ミティゲーション—自然環境の保全・復元技術—』（共著）（森本幸裕・亀山章（編）・2001・ソフトサイエンス社）◆『雁よ渡れ』（呉地正行・2006・どうぶつ社）◆『コウノトリの贈り物』（共著）（鷺谷いづみ（編）・2007・築地書館）◆『温暖化と生物多様性』（共著）（岩槻・堂本（編）・2008・築地書館）◆『消える日本の自然』（共著）（鷺谷いづみ（編）・2008・恒星社厚生閣）◆『日本の希少鳥類を守る』（共著）（山岸哲（編著）・2009・京都大学学術出版会）◆『いのちにぎわうふゆみずたんぼ』（呉地正行・2010・童心社）◆『東日本大震災の湿地への影響と水鳥 景観の生態史観 攪乱と再生の環境デザイン』（共著）（森本幸裕（編）・2012・京都通信社）◆『鳥との共存をめざして』（共著）（由井正敏ほか（編）・2011・中央法規）◆『シジュウカラガン物語 しあわせを運ぶ渡り鳥、日本の空にふたたび!』（呉地・須川（編）・2021・京都通信社）

【受賞】

第33回愛鳥週間「全国野鳥保護の集い」環境庁長官賞（雁を保護する会会長横田義雄、1979年）

日本鳥学会鳥学研究賞（横田義雄・大津真理子・呉地正行、1981年）

第48回愛鳥週間「全国野鳥保護の集い」日本鳥類保護連盟総裁賞（会長呉地正行、1994年）

「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰（保全活動部門）（会長呉地正行、2001年）

愛知万博（愛・地球博）愛・地球賞（日本雁を保護する会、2005年）

農業農村工学会・環境賞（日本雁を保護する会<共同受賞>、2010年）

イオン環境財団「生物多様性日本アワード」グランプリ（日本雁を保護する会、2011年）

第69回愛鳥週間「全国野鳥保護の集い」環境大臣賞（日本雁を保護する会・八木山動物公園、2015年）

ラムサール条約「ラムサール賞・ワイズユース（湿地の賢明な利用）部門」（呉地正行、2022年）

受賞のことば



日本雁を保護する会 会長

呉地正行 (くれち まさゆき)

この度は鳥類学の分野で最も権威がある山階芳麿賞を頂くことができ、大変光栄です。

また今回の受賞が、個人ではなく日本雁を保護する会としての受賞であることは特にうれしく思っています。これは長年にわたり、多くの会員とともにやってきた、日本へ渡るガン類とその生息環境の保護・保全・復元活動全体が評価されたものと考えていますが、この喜びを保護する会の会員全員、および国外の関係者とも分かち合いたいと思います。

7月22日には、赤坂御用地内で日本雁を保護する会会長として、山階鳥類研究所総裁の秋篠宮殿下から山階賞を直接頂き、感激とともに思いを深めたことがあります。

それは絶滅寸前だったシジュウカラガンを、国内外の多くの方の協力を得て回復させることができたことです。

40年余りに及ぶ回復への歩みについては、保護する会発足50周年を記念して出版した「シジュウカラガン物語」(京都通信社、2021)に詳しくまとめましたが、回復計画を始めた当時、日本へ渡来する個体は最大3羽しかいませんでした。保護する会の創設者で前会長の横田義雄(1905-2003)はその復活に強い思いを持ち、それが回復計画の原点となりました。

1980年の5月9日に、横田は春の園遊会に招かれ、赤坂御苑で昭和天皇とガンについての会話を交わし、その詳細が横田の随筆「5月9日のこと」^(*)に残されています。

陛下ご自身が皇居でガンを飼育されていたことや、シジュウカラガンにご関心があることなどが記され、会話はここで終わります。しかし、横田が一番伝えたかったのは、シジュウカラガンの復活を願う「横田の夢」だったと、その心中を述べています。その後シジュウカラガンは見事に復活し、その数は約1万羽まで増え、夢は現実になりました。

前会長の横田と昭和天皇のガンの会話から42年後の今年、同じ赤坂御用地内で、昭和天皇の孫に当たる秋篠宮総裁から、シジュウカラガン回復も含めた保護する会の活動が評価され、会長として山階賞を頂けたことは大変感慨深く、何か因縁めいたものも強く感じています。

更に今回、これまでの当会の活動について多くの皆様にお伝えできる記念講演の場を設けていただき、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

(*)『横田義雄随筆集第5冊 雁の随筆』(横田義雄・1997・日曜随筆社)

講演要旨

日本へ渡るガン類の歴史的変遷と その保全・復活の取り組み

日本雁を保護する会 会長

呉地正行

日本雁を保護する会は、1970年に宮城県仙台市福田町でガン類の密狩防止を契機に発会した。かつては全国で見られ、1950 - 60年代に激減したガン類とその生息地の保護・保全・復元のために調査研究、啓発普及活動、及び行政等への提言などを行ってきた。

1970年代より国内各地での各種ガン類の生態解明に取り組み、1971年にはマガン、ヒシクイの狩猟禁止と、天然記念物指定実現へ貢献した。

ヒシクイ：1984年からカムチャツカでの首環標識調査を支援し、1991年7月には共同繁殖地調査を開始し、日本へ渡来するヒシクイが2亜種 (*A. f. serrirostris* と *A. f. middendorffii*) 存在し、いずれもカムチャツカから飛来することを明らかにした。

シジュウカラガン：1983年に仙台市八木山動物公園と回復計画を開始。その後日ロ米が協働し、繁殖地の千島での放鳥と越冬地でのモニタリングを行い、日本へ渡る群れの回復に成功し、その数は当初の3羽から約10,000羽まで増加し、絶滅の危機を脱した。

マガン：1991年7月、ロシア・チュコト地方のアナディール低地で日ロ共同標識調査を開始し、一部が日本で確認された。1993年冬季に日米共同で越冬地の伊豆沼周辺で捕獲標識したマガン10羽を電波追跡し、その渡り経路と繁殖地がチュコト地方南部のペクルニイ湖沼群であることを特定。2003年度から、日ロ共同で繁殖地での生態・標識調査を実施し、多数の標識マガンが日本へ渡ることを確認した。

ハクガン：1993年冬に日米ロ共同でアジアへ渡るハクガン復元事業を立ち上げ、同年夏に取り組みを開始し、その後継続したモニタリングを行い、渡来数は約2,000羽となり、途絶えた日本への渡りが復元した。

生息地の開発予防のために、1993年度にガン類渡来地目録を刊行し関係自治体等へ配布し、予防効果を上げることができた。

1971年以降のガン類のデータをもとに、気候変動の影響を調べ、2000年度からは日ロ共同で、繁殖地の気象データも収集し、ガン類の越冬地の北上とマガンの個体数増加が越冬地と繁殖地で進行する温暖化と関連するという結果を得た。

生息地保全・復元のために、1996年に宮城県・蕪栗沼周辺でガンと農業の共生をめざすシンポジウムを共催し、そのガイドラインとなる「蕪栗沼宣言」を採択した。1997年以降は、水鳥との共生をめざす「ふゆみずたんぼ」の普及と初めて水田に注目したラムサール条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」誕生(2005)に貢献した。

講演要旨

東アジアのハクガン復元の 取り組みとその成果



日本雁を保護する会

佐場野 裕 (さばの ゆたか)

ハクガンは、現在の日本では、レッドデータブック（環境省，2014）で絶滅危惧 IA 類として記載される希少種である。しかし、さまざまな資料により明治時代初期まではハクガンが普通の冬鳥として飛来していたことが示されている。しかしながら、明治になると、開発による生息地の消失と乱獲のためにハクガンの日本への定期的な渡りは消滅してしまう。それまでは制限されていた狩猟が、一般人でも可能となったことで乱獲が始まり、特に白くて大きいハクガンは集中的に狙われたと考えられる。また、北東アジアのハクガンの繁殖地でも、狩猟による乱獲に加え、ツンドラ地帯にトナカイの放牧が導入されハクガンの繁殖環境を破壊したこともハクガンの群れをアジアから消滅させた原因と考えられている。

日本への渡りが消滅した後は、アジアで唯一、北極海に浮かぶウランゲル島で約 6 万羽のハクガンが集団繁殖しているのだが、この群は北米大陸で越冬する。そこで、この群れを人為的に分散させる形で、アジアで越冬する個体群を復元させようという計画が、1993 年より日ロ米の研究者などによる国際共同計画として実施された。

その結果、1993 年以前はハクガンの定期的な国内への飛来は見られなかったが、1993 年以降は定期的な飛来が見られるようになり、その後ハクガンの越冬数は着実に増加してきている。また、越冬数の増加とともに、ハクガンが飛来する場所も増える傾向にある。今後は、採食地と^{ねぐら}を備えたハクガンの生息環境を整えていくことで、失われていた生息域の復元をめざしたい。

「徳川実記」にある狩猟の記録や、汐留遺跡の仙台藩江戸上屋敷跡から出土したガン類の骨の分析から、江戸時代には隅田川河口などの東京湾沿岸の湿地は、国内有数のハクガン生息地であったことが解明されている。また、「明治の初めに皇居の堀・赤坂溜池でしばしばハクガンが見られた」という記録も残されている。2015/2016 冬期には、東京湾周辺では 58 年ぶりに、ハクガン幼鳥 3 羽が荒川河川敷に飛来し、越冬した。東京湾沿岸の湿地環境をガン類が生息できるように改善させ、なんとかしてハクガンを復活させたいものである。

再び、東京の空をハクガンが舞う姿を見ることも夢ではない。

講演要旨

ガン類の渡りを解明する 国際共同調査への架け橋



日本雁を保護する会

須川 恒 (すがわ ひさし)

私はガン類が越冬しない京都市(山科区)に住んでいるが、日本雁を保護する会の活動にかかわってきた。ここ6年は呉地正行会長と「シジュウカラガン物語」の編集にかかわり昨年京都通信社から出版した。

活動にかかわりだした経緯は、1978年秋に京都の鴨川に渡来した足環を付けたユリカモメを契機に、当時の山階鳥類研究所標識センター長吉井正氏の支援も得て、標識者のカムチャツカに住む鳥学者ニコライ・ゲラシモフ氏との文通が1980年5月からはじまったことがきっかけだった。1982年に雁を保護する会と出会い、交流がはじまった。1970年代から琵琶湖の水鳥調査にかかわっていて、特に南限のガン類の越冬地である琵琶湖の湖北地方に注目していた。

カムチャツカでゲラシモフ氏がヒシクイに首環標識をする調査を仲立ちすることになり、1986年以降この調査は全国的にも大きな成果をあげ、琵琶湖湖北地方の亜種オオヒシクイがカムチャツカから飛来していることも判明した。1991年から日ロの共同調査がカムチャツカなどで実施され、私も1991-1995年にカムチャツカの調査に参加した。

首環標識観察者のネットワークができると同時にガン類の約50ヶ所の渡来地はさまざまな保護上の問題をかかえていることも判ってきた。このため全国的に渡来地の情報を俯瞰し渡来地の保護や保全を促すガン類渡来地目録を作成した。この目録を1994年に出版し、関係者に広く配布、渡来地保全の流れをつくることができた。この頃から湿地保全の国際環境条約であるラムサール条約へのかかわりもはじまり、特に呉地のかかわりが深く、今年呉地は同条約のラムサール賞を受賞した。

1989年にゲラシモフ氏を日本に招待したことがきっかけとなりカムチャツカにシジュウカラガン増殖施設をつくり千島列島のエカルマ島で放鳥する事業がはじまり、かかわることになった。

日ロ米の信頼と協力によって東アジアにおいてシジュウカラガンやハクガンの渡りの復活が実現したことは、深刻な対立構図の世界の現状の中で注目すべき活動になっている。

ガン類の渡来地がない京都からみると、「物語のおわりはあらたな物語のはじまり」であり、「昭和に生まれ平成に育ち、令和へと受け継がれる物語」である。「福田町の次は全国の空にガンが舞う風景をとりもどすことが令和の時代の夢であり課題」である。先は遠い…。

山階芳麿賞とは

山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団創立 50 周年にあたる 1992 (平成 4) 年に、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者 (個人または団体) を選考します (委員会の構成は下欄を参照)。

● 受賞者には、山階鳥類研究所総裁の秋篠宮皇嗣殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらひ、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回 (2003 年) の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾) が贈られることになりました。



山階芳麿賞のメダル

表：山階芳麿博士の肖像 裏：ヤンバルクイナのレリーフ
裏面に受賞年と受賞者の氏名が刻印される

山階芳麿賞選考委員の構成

委員長：奥野卓司 ((公財) 山階鳥類研究所所長)
委員：井田徹治 (共同通信社科学部編集委員)、
牛山徹也 ((株) NHK エンタープライズ自然科学部エグゼクティブ・プロデューサー)、岡安直比 (NPO 法人 UAPACAA 国際保全パートナーズ代表理事)、小川博 (東京農業大学農学部教授)、尾崎清明 ((公財) 山階鳥類研究所副所長)、小宮輝之 (元恩賜上野動物園園長)、高橋真理子 (ジャーナリスト、元朝日新聞科学コーディネーター)、山岸哲 (元 (公財) 山階鳥類研究所所長)、渡辺茂 (慶応義塾大学名誉教授)、綿貫豊 (北海道大学水産学部教授)、和田勝 (東京医科歯科大学名誉教授)

以上五十音順 ※役職は、選考当時。

山階芳麿博士



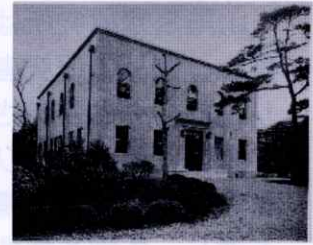
山階芳麿博士は、1900 (明治 33) 年 7 月 5 日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学 (現東京大学) 理学部動物学科

選科に入学、動物学の基礎を学びました。同選科を 1931 (昭和 6) 年に修了、1932 (昭和 7) 年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939 (昭和 14) 年から、北海道帝国大学 (現北海道大学) の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942 (昭和 17) 年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949 (昭和 24) 年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌 1950 (昭和 25) 年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977 (昭和 52) 年、ノーベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン・デラクール賞を受賞、翌 1978 (昭和 53) 年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989 (平成元) 年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』(第 1 巻：1933、第 2 巻：1941)、『世界鳥類と名辞典』(1986) 他、論文多数。

山階鳥類研究所の紹介

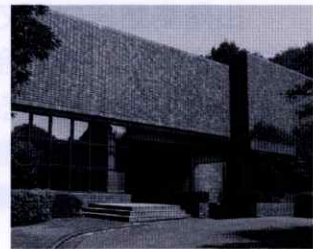
山階鳥類研究所の歴史と概要

山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900 - 1989）が1932（昭和7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和17）年に文部省（当時）から許可を得て、財団法人として発足しました。



東京渋谷南平台の旧研究所

その後、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、また1986（昭和61）年には、礼宮殿下（現秋篠宮皇嗣殿下）を総裁としてお迎えしました。2012（平成24）年4月、公益法人制度改革に伴い、公益財団法人に移行し、現在に至っています。



千葉県我孫子市の現研究所

現在、山階鳥類研究所は、日本最多の鳥類標本と文献を所蔵し、鳥類標識調査を長年実施している機関として、外部の鳥類研究者や関連分野の研究者、アマチュアの方々との連携をはかりながら鳥類全般に関する科学研究を行っています。

約8万点を所蔵する鳥類標本と、約5万点を所蔵する図書資料については、その維持管理とデータベース化、コレクションのいっそうの充実を目指した収集を行っています。また、これらの資料を用いた鳥類に関する基礎的なデータの作成や研究も行っています。特に近年では、X線CTを用いた標本の3次元形態をデジタル化・アーカイブ化する取り組みや、約2万点を所蔵する組織サンプル・DNAを用いた鳥類の系統・進化・分類に関する研究に力を入れています。

さらに、鳥類の渡り経路や寿命の解明、環境の長期的モニタリングなどの視点から環境省委託の鳥類標識調査や海鳥の繁殖状況調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめに取り組んでいます。アホウドリの新繁殖地への誘致やヤンバルクイナの生態研究など、希少鳥類の保全のための研究を行っています。

理事長、所長を含め人員数は22名で、そのうち14名の研究員・専門員が研究業務にあたっています。鳥類学専門誌「山階鳥類学雑誌」を年2回、ニュースレター「山階鳥研 NEWS」を隔月発行して、鳥類学と地球環境保全の普及啓発を行っています。

現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで、相互に研究協力しています。また、京都市動物園と研究・教育に関する連携協定を、ビショップ博物館（ハワイ）と学術交流・協力に関する連携協定を結んでいます。さらに、我孫子市鳥の博物館を所管する我孫子市教育委員会と連携協定を結んで、同博物館と、所蔵資料や研究成果の展示、講演会や共同研究などを通じて連携しています。

ご支援のお願い

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学的研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、生物多様性の維持、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研 NEWS」(年6回発行)や、学術雑誌「山階鳥類学雑誌」(年2回)をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。

賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

賛助会のご案内

○法人賛助会員

(年会費1口5万円) 「山階鳥研 NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」をお送りします。

○個人賛助会員

(年会費1口1万円) 「山階鳥研 NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

(年会費1.5口1万5千円) 「山階鳥研 NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

賛助会員申込書(個人・法人)および詳しい資料をお送りいたしますので、入会をご希望の方は下記へご連絡ください。

山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしくお願いたします。

[入会申込み・資料請求の宛先]

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115 (公財) 山階鳥類研究所 事務局

TEL: 04-7182-1101 FAX: 04-7182-1106

E-mail: kaiin@yamashina.or.jp URL: <https://yamashina.or.jp>

※ 山階鳥類研究所は公益財団法人です。

当財団に対する寄附金及び賛助会費は税制上の優遇措置の対象となります。

山階芳廬賞 歴代受賞者

- 第1回 羽田健三† (信州大学名誉教授)
- 第2回 松山資郎† (山階鳥類研究所顧問)
- 第3回 中村司† (山梨大学名誉教授)
- 第4回 黒田長久† (山階鳥類研究所所長)
- 第5回 中村登流† (上越教育大学名誉教授)
- 第6回 正富宏之 (専修大学北海道短期大学教授)
- 第7回 樋口広芳 (東京大学大学院教授)
- 第8回 山岸哲 (京都大学大学院教授)
- 第9回 藤巻裕蔵 (帯広畜産大学教授)
- 第10回 小城春雄 (北海道大学大学院教授)
- 第11回 中村浩志 (信州大学教授)
- 第12回 石居進 (早稲田大学名誉教授)
- 第13回 由井正敏 (岩手県立大学教授)
- 第14回 長谷川博 (東邦大学教授)
- 第15回 立川涼† (愛媛大学名誉教授)
- 第16回 森岡弘之† (国立科学博物館名誉研究員)
- 第17回 日本イヌワシ研究会
- 第18回 橘川次郎†* (クイーンズランド大学名誉教授)
小西正一†* (カルフォルニア工科大学名誉教授)
- 第19回 上田恵介 (立教大学名誉教授)
- 第20回 江崎保男 (兵庫県立大学教授)
- 第21回 渡辺茂 (慶應義塾大学名誉教授)

いずれも受賞当時の役職。

†：故人、*：特別賞



【三種のカワセミ】

山階鳥類研究所設立当時に玄関に飾られたステンドグラスです。

左から旧北区のアカショウビン、東洋区のヤマショウビン、オーストラリア区のシロガシラショウビンで、広くアジアや太平洋産鳥類を研究する目標を表徴したものです。「山階鳥類学雑誌」の表紙や「山階鳥研 NEWS」の題字にも使われており、山階鳥類研究所のシンボルマークとなっています。

第 22 回 山階芳麿賞記念シンポジウム ガンが渡る風景を日本の空にもう一度

～絶滅から復活への道を歩み始めた日本のガンと、
日本雁を保護する会 52 年間の活動～

発行日

2022 年 9 月 23 日

編集・発行

公益財団法人 山階鳥類研究所
千葉県我孫子市高野山 115

印刷

NEC マネジメントパートナー株式会社

日本雁を保護する会に第22回山階芳麿賞を贈呈

第22回山階芳麿賞の贈呈式を、7月22日(金)に赤坂御用地内の赤坂東邸(東京都港区)で開催し、日本雁を保護する会に山階芳麿賞を贈呈しました。記念シンポジウムを、9月23日(金)に東京大学弥生講堂で開催する予定です。

贈呈式は、2020年7月に開催した第21回山階芳麿賞の贈呈式に引き続き、最小限の人数の関係者参加のもと、マスク着用等の感染対策を取って開催しました。

式は壬生基博理事長の挨拶に始まり、山階芳麿賞選考委員長の奥野卓司前所長(現シニアフェロー)が選考理由について説明し、総裁の秋篠宮皇嗣殿下から、呉地正行日本雁を保護する会会長に賞状と記念メダルが贈呈されました。続いて福島範彰朝日新聞社CSR担当執行役員から、副賞(朝日新聞社賞)として盾と賞金50万円の目録が贈呈されました。最後に呉地会長が挨拶し、鳥類学の分野で最も権威ある山階芳麿賞をいただくこと



秋篠宮総裁から賞状を受ける呉地会長

第22回山階芳麿賞記念シンポジウム

ガンが渡る風景を日本の空にもう一度

～絶滅から復活への道を歩み始めた日本のガンと、日本雁を保護する会52年間の活動～

【日付】 9月23日(金・祝)
13:30～16:00

【会場】 東京大学弥生講堂

事前申込み制。無料。新型コロナウイルス感染症の状況によって、ウェブによる開催に変更になる場合があります。詳細が決まりましたら山階鳥研のウェブサイトでご案内します。

◆ 講演

『日本へ渡るガン類の歴史の変遷とその保全・復活の取り組み』

呉地正行(日本雁を保護する会会長) ※写真上

『東アジアのハクガン復元の取り組みとその成果』

佐場野裕(日本雁を保護する会) ※写真中

『ガン類の渡りを解明する国際共同調査への架け橋』

須川恒(日本雁を保護する会) ※写真下

◆ 質疑応答

【主催】 山階鳥類研究所

【共催】 朝日新聞社【後援】 我孫子市(予定)



ができていへん光栄に思っていると述べました。さらに、今回の受賞が個人ではなく会としての受賞であることは、長年にわたり、多くの会員とともにこなってきた、保護、保全、復元活動全体が評価されたものだと考えており、特にうれしく思っていると述べました。

山階芳麿賞は、財団設立50周年にあたる1992(平成4)年に山階鳥研の創立者、故・山階芳麿博士の功績を記念して設けられました。表彰は隔年で行われ、

日本の鳥類の研究または鳥類保護に関して顕著な功績のあった個人または団体に贈られます。



朝日新聞社賞の贈呈に先だって祝辞を述べる福島範彰朝日新聞社CSR担当執行役員



【サントリーの愛鳥活動】

サントリーの愛鳥活動ホームページは、200種以上の野鳥が、解説・イラスト・写真・鳴き声付きで楽しめる「日本の鳥百科」など情報が満載です。スマートフォンでもご覧いただけますので、是非一度おたずねください。

SUNTORY

愛鳥活動 検索

<http://suntory.jp/BIRDS/>